



審査講評

第六十回展審査部長 加藤東陽

一月一日に発生した「令和六年能登半島地震」により、お亡くなりになられた方のご冥福をお祈り申し上げ、また、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

全日本書初め大展覧会は、今年で第六十回を迎えるました。全国各地より席書の部三千二百七十一点、公募の部一万千二百十三点、合わせて一万四千四百八十四点の力作が寄せられました。指導者の先生方には心から感謝いたしますと共に、その指導に応えて、すばらしい作品を出品されました皆さんに心から敬意を表します。

審査会は日本武道館において行い、「席書の部」を一月六日に二十五名の審査委員で、「公募の部」を同二十一日に二十六名の審査委員で、公正かつ厳正に投票によって行われました。審査方針は、一つの書きぶり（書風）や地域の偏りがないよう配慮すると共に、殊に公募の部においては、要項にある「書初めにふさわしい語句」という観点からも検討されました。席書及び公募の作品は、共にレベルが年々向上しており、審査にも一段と力が入りました。その結果、内閣総理大臣賞に中村美月さん（席書の部）、日本武道館大賞に出井絢菜さん（公募の部）、文部科学大臣賞に堀澤橙さん、池田希帆さん（以上席書の部）、篠原朝陽さん、今関心華さん（以上公募の部）をはじめ、各賞が決定いたしました。受賞されました皆さん、誠におめでとうございます。

受賞された皆さん的作品は、いずれも日頃の精進の成果として、小・中学生の作品においては、筆づかい・字形・字配り（全体構成）などの基本的な書写力をしっかりと身に付けており、高校・大学及び一般の作品においては、古典を背景にした書の芸術性に重きを置いて、筆をもつことへの自信や、言葉を書くことへの喜び、そして更に前進したいという意欲を感じられる堂々とした立派な作品でした。

また、上位の賞の決定にあたっては、一回目の投票では決まらず、決選投票を行うなど、実力が伯仲していたことも申し添えておきます。

さて、折りしも、昨年十二月に文化審議会無形文化遺産部会が、国としてユネスコの無形文化遺産に登録を申請する候補として「書道」を選定（審議・決定は二〇二六年十一月頃の見込み）と報じました。よって、これからは、書道文化を次世代へとつないでいくために、これまでの歴史と伝統を継承していくとともに、時代の変化に応じた新たな創造と発展も求められます。

この全日本書初め大展覧会においても、昭和四十年に開催以来、日本武道館の精神「真・善・美」を掲げ、来年度は第六十一回展となりますので、来年も全国から、多数の力作にお会いできることを期待し、審査講評といたします。